

ちよつとしい話

～恩～

「仰げば尊し、我が師の恩、教えの庭にも、はや幾年、思えばいと疾し、この年月：互いに睦し、日頃の恩、別かるる後にも、やよ忘るな、身を立て名を上げ、やよ励めよ、今こそ別れめ、いざさらば」と歌う卒業式が挙行される季節になりました。しかしながら現代はこの歌を合唱する学校、しない学校とあるそうです。『三步下がって師の影を踏まず。』昔から、教えを請う者と教える立場にある者とは互いに尊守する礼儀があります。身近に立場を教えるのは家庭生活からです。父母恩重経にあるように人間はまず父母の大恩に感謝する。その爲には父母に孝を尽くし、夫婦は相和し、兄弟仲良くする事です。調和の取れた和合相の家庭には神仏が宿り、天地の恩恵に預かれるのであります。青少年の教育の節目々に、この歌の内容をよく理解させ唄わせて欲しいと思います。自我自賛、偏見が美德になっては困ります。大自然の恵みと万人の労苦の中に生かされている自分であることを熟知させ、共に徳を高めていき、恩に報いる様に努力精進していかなければ日本の将来は無いかもしれません。

恩を使う言葉には恩愛、恩威、恩顔、恩義、恩遇、恩恵、恩師、恩賜、恩情、恩人、恩典、恩徳、等たくさんあります。受けた恩を仇で返す事の無いように、「トラは死して皮を残し、人は死して名を残す」そうですが恩を返して死にたいものです。この歌にも「いと疾し」とあるように「光陰矢の如し」です。何時寿命が果てるか分かりません。平沢興氏の詠に「生かされて 生きるや今日の この命 天地の恩 かぎりなき恩」、報恩感謝の出来る日暮を∞

善入院油掛地藏尊